木と建築で創造する共生社会実践研究会

A-WASS 事務局長通信 第 3 号

http://a-wass.org/

会長　長澤　悟　　編集　花岡 崇一

A-WASS 会員講演会報告

9 月 9 日、“美夢” にて念願の講師澁澤寿一氏のお話をたっぷりお聞きする場が持てました。なぜ念願だったかと言うと、いくつかご一緒した場での渋澤さんの短い言葉が心に突き刺さっていたからです。

澁澤さんの活動の一つに、『聞き書き甲子園』があります。高校生がお年寄りから聞き取りし、まとめます。マタギの人から「生きていくために働く。何の不安もない」と聞き、『働く』とは？と考え始めます。250 年の杉の森で、『私たちの社会は杉を超えられるか？』と、不安が湧いてきます。親たちの世代（年功序列、終身雇用）から、人生モデルの崩壊・（年金、社会保障、解雇など）不安の時代の到来に生きる高校生たちの不安。渋澤さんは自分たち世代にも『責任がある』と、つぶやきます。地域の自然、祖霊、神々には「無関心」、他人を「無視」他世代は「めんどう」、生産と消費の分離（働くことと関係）・・持続可能ではない社会をつくっているのではと考えています。

・1992 年、岡山県真庭市に入った。「あの山もらってくれ」といわれるぐらい寂れていた。若手経営者を中心に「21 世紀の真庭塾」結成。その時 18 年後の自分の姿を想像してもらった。「私、造り酒屋の均ちゃんですが、私の酒蔵では、10 年ほど前から、タンクを洗う洗剤に、環境負荷の低い、砂糖を原料としたものを使っている。・・冬季の温水プールには地元製材業の自家発電による電気と蒸気が使われている」なんと、80%が当たっているのです。『未来は自分たちの頭の中にあるのだ』地元の人たちの自力の立ち上がりが大事。コンサルタントではなく、『個人』で逃げずに地域に関わると決心したそうです。

・バイオマス・タウンのモデルといわれる真庭市だが、林地残材の集積基地を作った時、持ち込まれた木の価格を決められない。仮にトン 3000 円と決めた。ここが出発点だった。価格を自分たちで決めることで『創意工夫が生まれ、事業がみんなのものになった』のです。石油代替量 27,000Kl/年を達成、年間 18 億円を外国でなく、地域内で回す地消にまわせたのです。

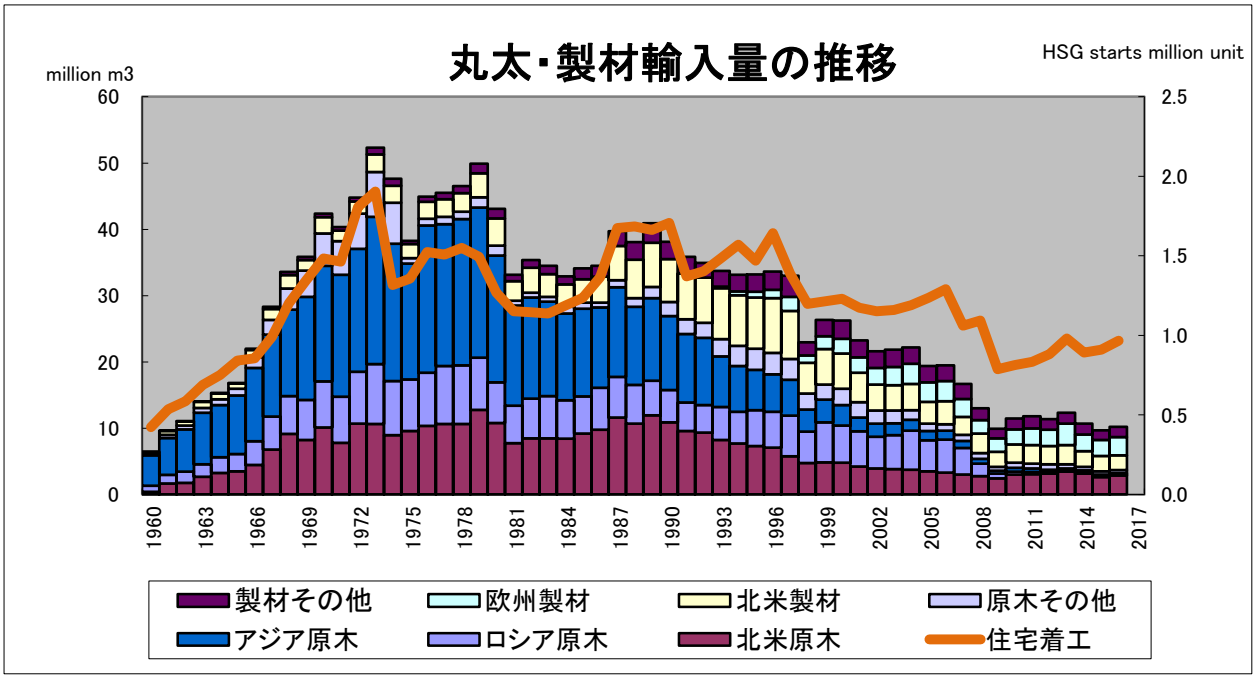
・トヨタを核とする豊田市、地域の人々がトヨタに集中。今、地域再生の取り組みを始めた。トヨタの人が、「よい自動車をつくろうと努力してきた。世界にも信頼で仕事ができると考えてきた。しかし、今存亡の危機だ、為替がすべてを握っている」（ウオール街にみるお金がお金を生む世界）

・真庭のアシタカ・赤木直人さん、豊田市の戸田友介さんの「生き方の紹介」など、地域再生は『人』　ということを実証しています。

澁澤さんは、スギに負けない持続可能な社会をつくるには、『人と人、人と自然、世代と世代が、つながること』だと言う。競争社会で顧みてこなかった価値→『関係性づくり』が大事。バイオマスはそのツールになるのです。講演会の詳しい資料を希望する方は、ご連絡ください。（文責　花岡）

戦後外材小史（連載１）

2017 年 7 月、EPA（EU との経済連携協定）締結に向け協議が加速されてきました。自動車は 7 年で、チーズは 10 年で関税撤廃、バターは低関税、パスタ・木材は市場開放、などと伝えられています。木材製品として CLT の輸入が増えそうです。A-WASS メンバーの二国さんは三菱商事勤務時代、ヨーロッパ材の輸入を初めて手掛けた一人です。二国さんのお書きになったものを中心に、「森と日本人の 1500 年」田中淳夫著　平凡社新書　「宇江敏勝の本５　樹木と生きる」新宿書房を参考に対話方式で考えます。



Ⅰ.「1945 年～1970 年」・・ブレトン・ウッズ体制下でアジア、北米原木輸入が増える

木材輸入が本格的に復活したのは、朝鮮戦争勃発（1950 年）からである。軍需用物資として外貨を割り当てられたからだ。停戦後も特需で景気が良くなり、木材需要は膨れ上がる。輸入量も毎年のように倍々に増えた。それでも木材需要に追い付かないから価格は高騰した。世論は木材を増産することを要求した。(田中)・・(花岡：文京区の焼け跡に父が自分で建てた家が完成したのは 1956 年。飯田橋にあった材木屋さんから用材を買ったようだが、貧しかったこともあり大半は古材であった)

1961 年に河野一郎農林大臣が『木材価格安定緊急対策』を打ち出す。外材輸入を完全自由化する一方、国有林や民有林の大増伐を進めるという施策である。日本の森林は急速に荒れ、外材シェアが増した。なお、この頃の外材は安くなかった。**為替が 1 ドル 360 円**の固定相場だったため、スギの中丸太一石（約 0.28 ㎥）が 1000 円台の時代に、米材は 2000 円を超えたという。外材は足りない国産材を補完する役割を担っていた。**最初から「安い外材」が日本の木材市場を席巻していたわけではない。**

山村では大規模な造林事業（補助金）が行われた。(拡大造林、分収林の造成。入会の里山も植林された)おかげで短期間に禿山を緑化することに成功し、林業地も活気に満ちたのである。大増伐と大造林、そして役物に頼った日本の林業は、森林風景を大きく変えた。大面積皆伐された山々が目立ち、若い造林地が増える。一方で**時間のかかる林業は敬遠される**ようになった。住宅用木材の調達は輸入で賄えばよいからだ。そのために放棄林が増えていく。植林後、手入れが行われなくなったのだ。(田中)

二国さんとの対話

花岡　[初期の輸入外材は、アジア原木、北米原木、ロシア原木ですね。事情を教えてください]

二国　「南洋材の歴史は資源開発の歴史でもあります。フィリピンから始まりマレーシアのサバ州・サラワク州、インドネシア、PNG、ソロモンと競って供給先を広げ、その国・地域の政治・経済と深く関わり、工業化を助けたと同時に**資源の枯渇を招いた**んです。60 年代後半以降、輸入商社が競って輸入し、製材工場・合板工場が競い合って新増設し、73 年には 2,678 ㎥のピークをむかえます。主な利用は製材、合板材料であり、節のない広葉樹大径木材はあらゆる用途に割安な材料として広まったのです」

花岡　「学校の工作で木と言えばラワン材でしたね」

二国　「同時に日本国内の広葉樹林は利用価値の低い資源として、拡大造林地の対象として針葉樹への林種転換で**急激な伐採**が行われてきたわけです」

花岡　「北米原木は、原木で太平洋を渡って運ばれたわけですね」

二国　「戦後の輸入再開は 48 年だが鉛筆用の特殊材で、60 年までは少量でした。60 年の国産針葉樹価格暴騰を受けての緊急輸入から、外材受け入れのための港湾整備が始まり、61 年より本格的輸入が始まったのです。国内で再製材される半製品が基本でした。情勢を一変させたのが 1963 年から安宅産業が投入した専用船です。輸入商社は競って専用船を投入し、4 年後には年間 500 万㎥の輸送能力となり、米材安定供給の基盤ができあがったのです。当時のおもな樹種はアメリカで余り利用されていなかった米ツガで、割安で国産ツガに似ていたことから、住宅用構造材から羽柄・化粧材まで一挙に利用が広がったのです。60 年代前半、清水・和歌山・田辺・広島等に競って大型港湾製材工場が新設され第一次隆盛期となりました。60 年代後半にかけても地方の港湾整備が進み、各地に木材工業団地が出来、国産材から米材への転換が進んだのです。同時に三都でも江間忠木材の京葉埠頭をはじめ大阪南港・千葉・袖ヶ浦に総合商社の専用埠頭が次々に競って建設されました。名古屋西部木材港も 68 年開港します。当初、三都圏も原木中心に受け入れていたが、この埠頭群がその後の製材品輸入時代の受け入れ基地になったのです」

花岡　「ロシア材は共産圏との貿易になりますね」

二国　「戦後のソ連材輸入は 54 年にスタートし、北海道や富山等北陸の製材工場が羽柄材需要の代用として製材を始めたのです。輸入が本格的になったのは 56 年の『日ソ国交回復に関する共同声明』以降ですが、その後 35 年間特殊な共産圏貿易として続きました。そこには自由な競争はなく、輸出会社は 1 社『全ソ木材輸出公団』であり、日本に到着して検量するまでは樹種・数量も不明確など通常の貿易取引常識とかけ離れた輸入でした。極東森林資源開発プロジェクトとして 69 年から 80 年代後半まで森林伐採用の機械とバーターでの原木輸入もあったのです。ただ、価格が相対的に割安であったこと、北海道や日本海側には物理的距離が短いことから順調に入荷量は増加しました」

「宇江敏勝の本５　樹木と生きる」から

宇江さんは私より 2~3 歳上の方です。和歌山県沖平出身で高校を卒業して森林組合や大きな山林家のもとで働き生計を営んできました。専業の炭焼きだったご両親が昭和 17 年手に入れた山を引き継ぎ、二十数年にわたって木を育てる経験もお持ちです。宇江さんの著作は宇江敏勝の本という名で 5 冊あります。山仕事の体験を踏まえたもので、『木や林業』を何も知らない私は宇江さんから多くを学びました。

拡大造林のころの体験と思索をいくつかご紹介します。

＜私の山林づくり＞

成人してから炭焼きとなり、つぎに地元の森林組合の作業員に転じてからも、私は沖平で植林を続けた。かつて畠や田圃であったところにも植えた。自分一人で一方から毎年少しずつ植えていった。

だからいま沖平の山林の樹齢はさまざまである。二十数年前に植えた木はすでに建築用材になるものがあり、片方にはまだ下草や蔦を刈ってやらねばならない部分も残っている。・・植林の現地では、まず邪魔になる雑木などを刈り払って片付ける「地ごしらえ」の作業がある。秋から冬にかけてしておき、春になるとそこへ苗木を植える。初夏には繁ってくる雑木雑草を「下草刈り」せねばならない。そして苗木はすべて活着するわけではないから、枯れたものは翌春にまた「補植」をする。さらに下草狩りを繰り返すこと数年、その後は 3~5 年間隔で行う。ほかに肥料を施す場合もある。生長するにつれて「枝打ち」をし、数年または十数年おきに出遅れた木の「間伐」もしてやる。あるいは病虫害駆除の消毒をすることもあり、ときには雪で傾いた木に紐をつけて引き起こすといった辛気臭い作業もしなければならない。

＜間伐のおくれ＞

間伐が進まないのはなぜか。一つには山の所有者が必ずしも山林づくりの専門家とはかぎらず、認識に欠けるからである。わが国の零細な山持ちの多くは戦後の植林ブームや土地ブームに煽られて山林を手にしたのだった。それまで薪炭林や採草地だった所、はては農業が振るわないために耕作放棄　された田畑にも杉や檜を植えた。町の不動産業者や医師などが、税金対策や財産づくり、または一時的な投機の手段として、奥地の山林を取得したケースも多い。彼らは木材を伐採できるまで育てた経験をもたず、自分の山の木を見ても、それが商品価値のあるものかどうかさえわからない。ましてチャンスがあれば、土地ぐるみで売却して儲けよう窺っている手合いは、間伐の必要性を説かれても、所詮は耳に入らないのだ。・・・国産材が振るわない大きな原因は外国産材を輸入しすぎるからだと、関係者は口を揃えて訴えている。しかし振り返ってみると、**外材のおかげでわが国の森林は蓄積を増やしてきたのだともいえよう**。戦後の復興とその後の経済成長はひきつづき大量の木材を必要としたが、国内には応じるだけの絶対量がなかったのである。・・当面の需要を外材に依存する一方で、荒れた山に木を植え育て、森林の蓄積をはかって今日に及んだ。（拡大造林の結果が、今の林業の困難の大本である。零細山林保有者、路網を入れようにも境界不明、権利の主張、森の手入れなし、補助金のあり方、年度計画で手いっぱいの森林組合。突破口を作りましょう。花岡）

編集後記

不定期で発行しますと宣言して、のんびりしすぎました。「戦後外材小史」4 回に分けて連載します。

今後の予定、最上・金山視察（10 月 13 日~14 日）、日本設計・木造三階建て校舎報告(10 月 28 日)事務局からご連絡します。

A-WASS 事務局長　花岡崇一
hanaoka@bdvision.co.jp